

博士学位論文要約文

題目：日本国内の日本語学校の成立基盤に関する研究

－「実施したカリキュラム」に注目して－

二子石 優

1. 本研究の目的（問い）と研究課題

日本国内の日本語学校はいかにして学校組織として存立しているのだろうか。この問いに対して、日本語学校の内側から組織を存立させようとする教育的営為を描き出すことが本論文の目的である。

この問いを検証するために3つの研究課題を設定した。1つ目は日本語学校が持つ社会的機能と制度基盤の不安定さ、行政による管理の厳格さの諸相を明らかにすることである。2つ目は事例研究を通して、日本語学校の内部に生じる教育的課題を析出することである。そして、3つ目は日本語学校に生じる課題に対して行われる教育的営為を読み解くことである。この3つの研究課題の関係性は並列的なものではなく、日本語学校をマクロな視点から捉える1つ目の研究課題のうえに、2つ目の事例研究が位置付き、最後に3つ目の研究課題として、事例研究から析出された課題に対応する教育的営為、それを学校組織として存立させる要因として読み解く構造となっている。

2. 本研究の概要

研究課題1については第一部第1章から第6章において日本国内の日本語学校をマクロな視点から捉え、以下のようにそれぞれ分析を行った。

1章においては、明治期から2020年までの日本語学校の歴史的変遷を追った。その際には社会的背景とそれを反映して発せられた法令や政策（その下位の施策）を押さえたうえで、法令や政策によって左右されうる学校数、学生数、進学・就職者数など統計の変化を中心に分析した。その結果、日本の近代化以降、様々な問題を抱えながら外国人留学生の受入れにおいても外国人労働者の受入れにおいても、日本語学校が海外からの移住希望者に対する日本社会のゲートウェイとして機能してきたことが分かった。日本語学校に在籍する学生の入口は法務省出入国在留管理庁（2019年までは入国管理局）によりコントロールされており、入国のみならず、在留も厳格な「管理」が行われている。一方で、「10万人計画」「30万人計画」といった数値目標が大きな意味を持っており、数値目標達成にかけて、法務省による入国審査が緩和化され学生数が増加し、達成後には入国審査が厳格化されるという繰り返しの下に日本語学校は存立していた。この学生数増減によって日本語学校数も増減を繰り返す不安定な様子が明らかになった。

第2章においては、第1章から導き出された不安定さは日本語学校特有の事象であるのかを問いに、日本国内の日本語学校を世界の中の語学学校に位置づけ比較分析を行った。比較対象は、英語という言語を資源に、国際教育を一つの産業分野として確立し、多数の外国人留学生を受け入れているオーストラリアの英語学校と、日本の留学生受入れとの類似性

の高い韓国の韓国語学校とした。その結果、オーストラリアは語学学校の約半数が、韓国は全ての語学学校が大学等の 1 つの課程として設置されているために、財政基盤が大きく、永続性の観点から安定していると分析した。一方、日本語学校は大学等から独立した形態をとっていることから、財政基盤が脆弱で、かつ 1 校当たりの学生数が少ないため、不安定さを助長する原因となりうると考察した。受け入れる学生の面からはオーストラリアは一国の学生への過度な集中は見られず、過度に社会情勢の影響を受けず、安定した学校運営が行える一方で、韓国の場合、日本よりも学生が一国に集中している度合いが高いため不安定さを秘めていると考察した。しかし、いずれの語学学校も「外国人」を対象とした産業であるために、国境を越えた移動が制限されると、一挙に不安定さが表出し、それが 2020 年以降の世界的な新型コロナウイルス感染症拡大により表れた様子を確認した。

第 3 章においては、日本国内のボランティアによって担われる地域日本語教室や大学、専修学校における日本語教育など、さまざまな施設・機関と日本語学校の比較を行い、日本語学校が持つ特有の機能を各種文献や法令から分析した。日本国内の日本語を教える施設・機関を「地域型」と「学校型」に分類し、さらに「学校型」の大学、専修学校との比較から、日本語学校の特徴として日本語学習を在留根拠とする在留資格「留学」を留学希望者に対して付与できることを示した。しかし、在留資格を発給する以外にも、学生募集、入国支援、生活支援、教育活動、学歴補完と外国資格・学習歴の評価・認証のいずれもが、外国人受入れにおいては欠かすことのできない機能であり、日本語学校からの学生を受け入れる高等教育機関や日本企業にとってはこれらの機能は所与のものとされていることを明らかにした。

第 4 章においては、不安定な制度基盤の上に成り立つ日本語学校はなぜ、業界全体がまとまり、日本語教育を推進することができないのか、その原因を探ることを目的に、日本の学校体系、日本語学校の制度面、日本語学校の業界団体、日本語学校の教師の 4 つに着目をして論じた。分析の結果、4 つの観点においてそれぞれ分断が生じていることを示した。分断が生じる背景には、日本語学校の収益構造が学生の学費にのみに依存しており、世界の外国人留学生・移住希望者の有限のパイを分け合う利害関係があり、それが原因であると考察した。

第 5 章においては、日本語学校の学生に着目し、在留管理、生活環境、日本語能力の面から分析を加えた。2013 年以降、数の上では中国を中心とした漢字圏出身者とベトナム、ネパールを中心とした非漢字圏出身者に二分され、在留資格認定証明書交付率、日本での生活状況、日本語能力も上位の漢字圏出身者と下位の非漢字圏出身者の二極化が進んでいる様子が明らかになった。2013 年以降に二極化した一方の極である非漢字圏出身者が日本語学校に急激に流入した。この学生たちを受け入れる機関として一部の大学の非正規課程や一部の専修学校が存在していた。つまり、本来は日本語能力の低い外国人留学生を受け入れる機関ではなかった大学非正規課程と専修学校であったが、実態に対応して日本語能力が十分ではない学生たちを受け入れていった。また、在留資格「特定技能」の創設により、初級

レベルの日本語能力であっても、日本国内の企業へも進路が開けていった。このように学生は二極化したものの、それを受け入れる日本社会が存在し、その社会への送り出し機能を日本語学校が果たしていると考えた。

第6章においては、日本の留学生受入れ全体に視野を広げ、「30万人計画」を通して、在学段階別に留学生がどのような経路を経て入学・進学しているか、そして卒業・修了後どのような進路を取っているかについて統計に基づいた分析を行った。その結果、日本の留学生受入れは数の面では日本語学校を起点とした動態が典型であり、その割合は「30万人計画」を通して、増加傾向にあることが明らかになった。さらに、非漢字圏からの留学生の進学ニーズに応える形で、専修学校の日本語学校化という現象も生じており、日本国内での日本語教育及び進学予備教育の必要性が増してきたことが明らかになった。

研究課題2については第二部第7章から第9章において、3校の日本語学校の教育実践をカリキュラムに着目して分析を行った。本研究で指すカリキュラムの概念は教科・科目の配列に限定せず、生活指導、進路指導といった教科外活動にまで広げた。また、カリキュラムを教え手の意図にのみ限定せず「意図したカリキュラム」：教育制度の次元で策定された各領域や教科等の教育内容、「実施したカリキュラム」：「意図したカリキュラム」を解釈した教師が実際の教育活動に向けて具体的に立てた指導計画、「達成したカリキュラム」：実際の教育活動を通じて学習者が獲得した概念・手法・態度といった複眼的な視点から捉えた。

第7章においては、大学進学希望者を対象とした東京日本語教育センターの事例研究を行った。「意図したカリキュラム」の次元からは、準備教育課程として大学進学を希望する多国籍の学生に対し、日本留学試験対策を中心とした日本語・基礎教科（数学・理科・外国語・地理歴史・公民）を中心にカリキュラムが編成されると考察した。「実施したカリキュラム」では大学学部進学を目的に、日本語科目7割、基礎科目3割と、日本語を中心としたカリキュラムを編成していた。さらに、日本語科目・基礎科目担当教師は授業という枠組みの中で、様々な違い（多様性）－日本語能力、漢字圏・非漢字圏の違い、基礎学力、学習スタイル、目標など－に対応することを課題としながらも、授業を実現している様子が明らかになった。「達成したカリキュラム」では、学校全体では多様な学習者に対応しており、進学を希望する学生に対しては、ほぼ目的を達成させていた。学生個人のレベルでは、大学受験のための進路相談や面接練習の手厚い指導に関して全ての学生が非常に役に立ったと感想を述べている。また、教師と学生の関係性が近く、授業内外において学生の相談やメンタルサポートもしており、それに対して好印象を持っていることが語られた。

第8章においては、大学院進学を希望する日本語上級者を受け入れるエール学園日本語教育学科大学院進学コースの事例研究を行った。「意図したカリキュラム」の次元では、日本の大学院が留学生を積極的に受け入れる状況と、漢字圏出身者（特に中国出身者）が大半のクラスにおいて、日本語能力試験対策と研究計画書の作成を中心にカリキュラムが編成されると考察した。また、大学院入試は研究科単位、研究室単位での合格基準が設けられるために、外部からは合格基準が分かりにくく、それに対応するため個別の進路指導が重要に

なると考察した。「実施したカリキュラム」では日本語関連科目が 86%を占め、それ以外にも、英語関連科目 7%、進路指導 7%の割合で授業が開講されていた。日本語科目のうちでは日本語能力試験対策が 36%、新聞やテレビ等の生教材を使った読解・聴解の授業が 29%、会話や作文の授業が 21%と、日本語能力試験対策に最も多くの時間を割いていた。進路指導は進路指導担当者（「メンター」）を設け、授業での指導と個別進学指導を行っていた。教師個人のレベルでは、中上級レベルの授業であるため、初級と比べると宿題は少なく、家庭学習は自主性に任せていること、進路指導に関しては個別指導が重要であること、大学院進学に関しては、日本語よりも研究計画書が重要と認識し指導していることなどが語られた。

「達成したカリキュラム」では卒業生の 41.5%が大学院進学（正規生＋研究生）、進学した大学院は国立 54.4%、公立 18.2%、私立 27.3%、専攻は文系 50%、理系 50%と半数ずつであった。また、卒業生の 35.8%が専修学校に進学し、そのほとんどが同校の応用日本語学科において次年度の大学院入学に向けて再度受験準備をしていた。学生個人のレベルでは日本語学習については、大学院進学後に日本語学校時代の小論文の授業が役に立った点、宿題の少なさから自主的な学習時間が取れた点などポジティブな意見もある半面、日本語能力が大学院出願条件（多くの場合日本語能力試験 N1 または N2）に達したら、授業では日本語科目よりも、個人的な受験勉強に専念したいという声が聞かれた。また、受験指導については、「メンター」が受験準備の進捗状況を気にかけてくれた点、また、直接研究計画書や面接練習をしてもらった点などが役に立ったと述べている。しかし、学生はエール学園の教師もしくは「メンター」のみに受験指導を頼るわけではなく、大学学部時代の恩師や、学部時代の留学先の大学教員や友人など様々なリソースを活用している様子も分かった。また、学生の専攻は理系から文系まで多岐にわたり、受験対策方法も人によって異なるため、クラスでの一斉授業では本当に学びたいこと（専門科目の勉強）が学べなかったという声も聞かれた。

第 9 章においては、学生数 100 人以下の小規模校であり、専修学校進学、就職希望者を対象とした日本語教育を行う日本語学院の事例研究を行った。「意図したカリキュラム」の次元では、非漢字圏出身の介護系専修学校もしくは介護職就職希望者を対象に、日本語能力試験対策を中心としたカリキュラム編成が行われるが、日本語能力と同様に専修学校進学のためには日本語学校時代の高い出席率が重要となると考察した。「実施したカリキュラム」では、日本語能力試験 N2 取得を目標に入学後 1～2 カ月かけて「50 音」の「読み」「書き」の習得とサバイバル日本語を、その後 3～4 カ月で初級の教科書を、4～5 カ月かけて中級の教科書を、その後中級の教科書へと進むカリキュラム編成をしていた。教師個人のレベルでは、学校が定めたカリキュラム通りには授業が実現せず、学生の習得度に合わせて進度を遅くするなどして、授業を成立させていた。また、進路指導や生活指導も重視している様子が明らかになった。「達成したカリキュラム」では日本語能力は卒業 8 カ月前の日本語能力試験では N4 かスコアを持たない学生が 7 割を占め、目標であった N2 には届いていないが、約 60%が専修学校進学、15%が就職（特定技能）と、進学・就職希望者はほぼ目的を

達成していた。学生個人からは進学・就職後に読むこと、書くことに苦勞しながらも、専修学校での学習や実習、または介護施設での業務を行っていることが分かった。また、担任教師との関係性が近く、担任からの生活のサポートを受けたことで、日本での生活が可能になったという。

終章では、第一部（1章～6章）と、第二部（7章～9章）の内容を整理したうえで、研究課題1の日本語学校が持つ社会的機能と制度基盤の不安定さ、行政による管理の厳格さの諸相について、研究課題2の日本語学校の内部に生じる教育的課題を析出し、最後に研究課題3として日本語学校を存立させる要因として教師の営為を読み解いた。結論として、学生に相対した教師による「実施したカリキュラム」の次元で①多様な背景を持つ学生の希望に応えようとする教育的対応、②日本語学校の出口まで責任を持って対応する進路指導、③学生の生活・心の中まで広がる生活指導という、「意図したカリキュラム」や学校が定めた「実施したカリキュラム」の「境界線」を遥かに越えたところまで、日本語学校の教師たちは教育的対応を広げていることが明らかとなった。このようなカリキュラムの「境界線」を越えたところで行われる献身的な対応により、教師と学生との関係性が築かれ、時には不満はあるけれども「良かった」と思える教育空間を作り出しているのである。以上が、日本語学校を内部から存立させる要因であると結論付けた。